

〔中〕 平成二十九年 久留米大学附設中学校入学試験問題

国語科

- 注意 1 解答はすべて解答用紙に記入せよ。解答用紙だけを提出すること。
2 〔一〕～〔四〕の各問いで、字数を指定している場合は、句読点などを含んだ字数である。

〔一〕 設問と解答欄は、解答用紙（全2の1）にある。

〔二〕 次の各問いに答えよ。

問一 次の①～④の□の中に体の部位を表す漢字一字を入れ、下の意味に合う慣用句を完成させよ。

- ① □ が回らない（借金などが多くてやりくりがつかないこと）
② □ を明かす（出し抜いてあつと言わせること）
③ □ を巻く（あまりにも優れていてひどく驚くこと）
④ □ が浮く（きざな言動に対して不快な気持ちになること）

問二 次の①～⑤の傍線部の中に、書き言葉としては不適切なものが二つある。その番号を答え、傍線部を適切な形に直したものを記せ。

- ① あまりに美味しかったので、全て食べてしまった。
② きちんとした態度で面接に臨む。
③ 明日は運動会だ。なので、今日は早く寝るつもりだ。
④ みなが口々に彼の功績をほめたたえた。
⑤ この先を曲がると、神社みたいな建物がある。

問三 次の①～④の文について、傍線部と意味の上で直接つながる語句をそれぞれ後のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ① 妹はきつと同じものが欲しいと言うだろうが、母は買わないだろう。
ア 同じものが イ 欲しいと ウ 言うだろうが
エ 母は オ 買わないだろう
- ② 実は雨の日に長靴をはいて散歩するのが好きだ。
ア 雨の日に イ 長靴を ウ はいて
エ 散歩をするのが オ 好きだ
- ③ 週末に姉が祖母と一緒に出かけたことを、私は知らなかった。
ア 祖母と イ 一緒に ウ 出かけたことを
エ 私は オ 知らなかった
- ④ もつと字を丁寧に書けば、見栄えが良くなる。
ア 字を イ 丁寧に ウ 書けば エ 見栄えが
オ 良くなる

〔三〕 次の【A】・【B】（ともに、野矢茂樹『哲学な日々』より）を読み、後の問いに答えよ。

【A】

なぜ論理的でなければいけないのだろう。全知全能の神々がいたとしよう。彼らのコミュニケーションはどのようなものになるだろうか。① 全知全能なのだからそもそも言語的コミュニケーション

など不要かもしれないが、言葉を ^aかわすとして、少なくとも、神に論理は不要となる。首を傾げた読者もいるかもしれない。全知全能の神様なら、完璧に論理的なんじゃないの？

いや、すべてお見通しなら、前提から結論を導くなんて手間をかける必要はない。神様は「だから」とか「なぜなら」なんて言わない。完璧な調和のもとにいる彼らには対立もないから、「（A）」なんて言う必要はないし、「（B）」ね」と神が神に向かって補足説明している。コウケイも変である。

人間同士でも、「あ・うん」のコミュニケーションが完璧に成り立っている仲間内であれば、神々と同じことが言える。「ツ」と言えば「カー」と返ってくる。「ツ」だから「カー」とか「ツ」だ、けど「カー」なんてまだるっこしいことは言わない。

すべてお見通しではなく、完璧な調和のもとにいるわけでもないから、論理が必要なのだ。仲間内の言葉しか話せない、「よそ者」とコミュニケーションがとれない。なに「こ」かを外部に向けて発信しようとするならば、^②言葉をきちんとつなげて差し出さねばならない。それができないと、「よそ者」は話にならない者となり、「うざい」と言われることにもなる。

論理的ではない人は仲間内の言葉しか話せない。仲間内の言葉しか話せない、「よそ者」を単純に切り捨てて排除することになる。それが危険なことだというのは、改めて言うまでもないだろう。（C）、よそ者排除ということとはたんに言葉の問題だけではない。しかし、言葉の問題は大きい。知識や考え方をあまり共有していない外部に向けて発信できる強靱な言葉をもたなければいけない。だからこそ、論理が必要なのだ。

【B】

論理的な文章を書きたい。言いたいことが明確で全体として、^cスジが通っている文章、一読してすつと頭に入ってくる文章、そういう文章をどうすれば書けるようになるのだろうか。

そんなふうに見えられて、いくつかアドバイスしたいことはある。例えば、接続表現を自覚的に使うこと。最初は、接続表現をいちいち明示して、自分がどういうふうと言葉をつなげようとしているのかを意識するのがよいだろう。

しかし、そんな技術論よりも、もつとすつとだいたいじなことがある。自分の文章を読む相手をリアルに感じるのだ。あなたは自分ではよく分かっていることを書く。しかし、読む人はそうではない。^③このギャップに無頓着だと、伝えたいことが相手に伝わらない。自分が分かっていることを、それを分かっている人の視線で見つめながら、書かなければいけない。

だから、いくらたくさん文章を書いても、それだけでは論理的な文章はうまくならない。例えば、日記をいくら書いても、論理的な文章を書けるようにはならない。日記は ^dD からである。誰かに読んでもらわねばならない。

そして、ここが肝心なのだが、読んでくれる相手は ^④物分かりの

悪い人でなければならぬ。物分りのよい人は、あなたの文章を「**ナン**」なく理解してしまう。これではだめだ。自分の文章がいかに理解されないか、いかに誤解されてしまうかを、うんざりするほどたくさん経験しなければいけない。この経験があなたの文章を鍛え^まてくれる。

理解されないと嫌になる。しかし、投げ出してはいけない。この人には分かってもらいたいと、強く思うことだ。なかなか分かってもらえない。だけど、分かってもらいたい。そんな相手をリアルに感じられるかどうか。⑤ 論理があなたの中に根つき、育つかどうかは、そんな他者への感受性と他者を思う想像力にかかっている。

問一 波線部 a～d のカタカナを漢字に直せ。

a カ(わす) b コウケイ c スジ d ナン

問二 波線部①「全知全能なのだからそもそも言語的コミュニケーション不要かもしれない」とあるが、このように言えるのはなぜか。左の説明文の() にふさわしい四字熟語を埋めよ。

全知全能の者同士が、互いの全てを()で理解できてしまうならば、わざわざ言葉で説明する必要がないから。

問三 【A】の(A)～(C)に入る接続表現を、それぞれ次のア～カの中から選び、記号で答えよ。

ア もしも イ ただし ウ しかし エ ところで
オ または カ もちろん

問四 波線部②「言葉をきちんとつなげて」とあるが、「言葉をきちんとつなげ(る)」と同じ意味の十字以内の表現を、【A】から抜き出して答えよ。

問五 波線部③「このギャップ」とは何か。三十五字以内で具体的に説明せよ。

問六 【B】のDに入る十五字以内の表現を考えて書け。ただし、「自分」という語で始めること。

問七 波線部④「物分りの悪い人」と同じ意味の二十字以内の表現を【A】から抜き出し、最初の七字で答えよ。

問八 波線部⑤「論理がくかかっている」とあるが、ここで筆者は、論理的な言葉を書くことを目指すためにはどのようなことをしなければならぬと考えているか。【A】・【B】全体の内容をふまえた上で、左の説明文の(Ⅰ)・(Ⅱ)を埋めて答えよ。ただし、(Ⅰ)は【A】から二十字以内で抜き出し、(Ⅱ)は自分の言葉で分かりやすく書くこと。

(Ⅰ) どのような狭い意識を抜き出し、(Ⅱ) こと。

問九 次のア～オの中から、【A】・【B】の内容に照らしてふさわしくないもの一つを選び、記号で答えよ。

ア お互いを完璧に理解出来る仲間同士の間では、論理的な言葉

づかいは必要とされない。

イ 「よそ者」との言葉によるコミュニケーションは、論理を用いなければ達成されない。

ウ 言葉の使い方は、他者とのあるべき関係を考えるときに重大な観点となる要素である。

エ 本主に論理的な文章を書きたいならば、接続表現の使い方のような小さな問題は無視するべきだ。

オ すべてお見通しの関係にある仲間文章を読んでもらっても、論理的な文章を書くためには役立たない。

④ 次の文章は、主人公が明治四十五年、尋常小学校三年生(今の小学校三年生)だったころのことを振り返ったものである。これを読んで後の問いに答えよ。

村一面の麦の穂が黄色く色づいた雨上がりのある日、小さい妹を背負った私は裏の山にのぼって行った。山の雑木林の中で白い梔子^{くもなし}の花が匂^{にお}っていた。私はその上手^{かみて}の雨に洗われた石ころの谷から水晶^{しすい}をほり出そうと思ったのである。棒切れでかき分けかき分けがしていると、ようやく豆粒^{まめつぶ}ほどの、しかし透きとおった六角水晶が出て来た。私はそれを大事そうに本の間にはさみ込み、胸をおどらせながらもっと大きいのを見つけようと次の谷に向かった。妹はいつの間にか背中で居眠りを始めていたので、首がくらくら動いて歩きにくかったが、勇んだ私はかまわずとっとと小走りに駆けた。ところが途中で、私はつい赤土に足をすべらせてころんでしまった。あつとはね起きてみると、長い尾をひいて山一杯に泣き入っている妹の泣き声が背中から聞こえた。私はおおお、おおお、と夢中にやした。

「おおお、おおお、泣くな、おおお」

間もなく妹は泣き止んだが、今度は、「たあい」「たあい」と訴えるので、私は帯をほどいて土の上におろしてみた。妹が小さい手でおさえている額の真ん中に、爪でひつかいたほどの傷が出来ていた。少し血がにじんでいるので、私は思いついて山畑の方に出て、蛭草^{ひるぐさ}(蛭に吸われた時その葉を貼りおくとたちまち癒ゆという草)をさがした。やつと草を見つけると、その青い葉を唾^{つば}でぬらして、妹の額にはってやった。

夕方、私は裏口から家に帰ると、母親は夕飯の雑炊^{ぞうすい}を焚^たいていた。^{*2}土くどの上に羽釜^{*3}からぶつぶつと菜^なつばくさい泡^{かわ}がふき出していた。私も妹ももう傷なんかのことは忘れていたが、^A仰々^{おごご}しい妹の額の蛭草を見つけて母親が叫んだ。

「おや！ どしたんじゃ！」

私はついすべってころんだのだ、と気にもとめず答えた。母親は私の背から妹を受け取り、蛭草の葉をはいで見えていたが、「大した傷じゃないけど、でも、額の傷はちよつとしたんでも、あとが残るんどのう」と眉^{まゆ}をひそめた。そう言われてみると、私も気にかかり出したが、今更^{いまさら}どうにもならんことなので黙^{だま}ってそこにいつたっていた。座敷^{ざしき}で遊んでいた大きい妹も、いつの間にかやって来て、黙^{だま}って母親の顔と私の顔をかわるがわる眺^{なが}めた。そこへ折悪^{せつあく}しく表^へ口から親父が外から帰って来た。母親は妹の傷を親父の目の前につき出し、この傷は残るだろうか、残らんだろうか、女の子だから気になると自分の心配を父親に分けてしまった。親父はじつとそれを

見つめていたが、やがて口を開いた。

「何の傷じゃ」

母親は私が説明したとおりをかいつまんで話すと、親父は今度は私に向かつて、もう一度尋ねた。

「何の傷じゃい？」

しかし、何の傷かくわしいことは私にも分からぬので、まごまごしていると、

「ええ？ それに分からんのか？ まぬけ野郎！」

大きな手のひらが私の頭にとんで来た。

「学校へ行きや勉強もしやせん！ 子守をさせりや子守も出来やせん！」

罵声と一緒に私の頭は大きな音をたててぺちやぺちや鳴った。私は頭を両手で抱えてふらふらとそこにしがむと、声をそろえて泣く二人の妹の声と、それをなだめる母親の声とが、入り乱れて聞こえた。

それから二、三日後、午後の教室の窓に桜の青葉がさあさあ風に鳴っていた。私達の授業は図画がはじまり、大倉先生は私達にこの時間は人の顔を描けと命じた。先生の顔でも、友達の顔でも、家の人の顔でも、誰のでもよいと言っているのである。級のものの大半は先生の顔を写生するのだと、先生を教壇の上に釘付けにした。中には友達同士向き合って写生し合っているものもあった。が、私は小さい妹の顔を描こうと思いついた。と言うよりも、この二、三日、私の頭には元どおりに治るか治らぬか分からぬという、妹の額の傷がこびりついて離れないでいた。画用紙を机の上に広げると、まず胸の中に妹の顔を思い浮かべ、鉛筆でまずその輪郭をとりはじめた。消しゴムで消したり直したり、長い間かかってやっと輪郭が終わると、私はほんのちよっぴりこわこわと額に傷の線を引いた。そしてしばらく画用紙を眺めていたが、どうも何だか物足りない。自分の気持ちとびったりしないのである。私は思案の末、傷の線の上に蛭草の葉を描き添えた。それから色にとりかかった。私は筆筒から色鉛筆をとり出すと、頬は黄色く髪の毛は黒く塗っていった。蛭草の葉は青にし、またしばらく思案してその傍に大げさではあるが、赤い血を少しにじませた。——と、こう言えば相当うまく描いたようになって、色がちぐはぐになったり、手垢がついたり、よごれた絵になってしまった。もう一度描きかえたいほどであったが終業の鐘が鳴ってしまったので、みんなの尻について先生の教卓に持って行くと、先生が尋ねた。

「こりや、誰だかな？」

「小さい方の妹です」

「この、ここは、どうしたんじゃ？」

「そりや、怪我をしたところです」

私は下手な絵を笑われているようで、急いで机に戻ると、あわてて道具をしまつて教室を出た。

ところが、翌朝学校へ行ってみると、私の図画は他の四、五人のものと一緒に甲上がついて教室の後ろの壁に貼り出されていた。私はそれまでに図画も書方も甲上をもらったことはただの一度もない。まして張り出しなどになったことは夢にさえない。私は全く夢のよくな心地で、みんなに交じって胸をどきどきさせながら妹の絵を見上げていた。みんなはあの絵を見たりこの絵を見たり、うまいなあ、上手だなあ、と感嘆していた。私の顔をみつけると、とくに私の絵を指さして感心してみせる生徒もいた。(生徒というものは貼り出

しになった絵は大抵無条件にほめそやすものである) 私は「みんなの後ろに肩をちぢめていた。と、だしぬけに、

「あんなもん、何じゃい！ 人間の顔と違うがな！」

と、わめく声が後ろから聞こえた。私はどの絵のことだろうかと、貼られた図画を見なおしていると、

「角が生えた牛じゃがな！ ちえっ！」

その声は人ごみをわけて壁の根にとび出すが早いか、跳び上がるようにして大きなげんこつを張り出しの上にびしやりとたたきつけた。あつと思ふ間もなく、私の小さい妹の顔は半分にちぎれて斜めにぶらさがった。

「あッ！ らあッ！」

と、思わず発するおどろきの声がみんなの口から吐き出された。

そして二十秒か、三十秒たった。

「誰じゃい？ やっつけ、やっつけ！」

中の一人が叫ぶと、山本春美の頭がみんなの間をくぐって、扉口の方に逃げようとするのを私は見つけた。「やっつけ！ やっつけ！」つづいて叫ぶみんなの怒声の中で、私は自分の妹の顔を半分に裂かれた憤怒がむらむらと湧き上がった。私は、思わず机のふたをつかむと、無我夢中で扉口に逃げた春美を追って駆け出した。

その日の放課後、私と春美とは教員室の隅に立たされていた。上級の生徒が時々用事で室に入ってきて来ては、横目でちらっと笑って出て行った。私の隣の春美は、私が机のふたで力まかせになぐりつけた後頭部のこぶを、わざと痛そうに大げさにさすっていた。自分の罪をいくらかでも軽くしようという魂胆であったろう。けれど私は何より大倉先生に叱られるそのことがつらい思いであった。先生は机にもたれて黙ったまま何か仕事をしていた。そんなに長い時間ではなかったのだが、私には非常に長く思われた。

やがて、先生はあごで二人を招いた。二人は並んで先生の机の前に立った。私は今にも目まいがしそうで、ぐっと二本の足に力を入れてふん張った。と先生は、

「どうじゃ、早う帰りたいじゃろう？」と笑いながら言った。

「はい」二人はうなずいた。

「もう言うことはない。今日の一時間目にみんなの前で話した通りじゃ」

「……………」

「覚えとるか？」

「はい」

「そんなら、あれ以上言うことはない。帰れ！」

二人はあつけにとられてぺこんとお辞儀をすると、羅紗の洋服くさい教員室をとお出した。教員室を出ると、春美はもう一度後頭部のこぶを大げさにさすりながら、

「ちえッ！」

と舌打ちして、憎々しげに私をにらみつけた。

そうしていつしか村の田植えもすむと、授業は短縮になり、一学期のおしまいの日が来た。五十人の生徒は一人一人教卓に呼び出されて通信簿をもらった。私は胸の動悸をおさえながら、自分の机の下でそっと広げて見た。と、あの時以来気になってならないでいた操作が、はつきり甲と読めるではないか。図画も甲である。他の学科はみな乙で算術だけが丙であった。しかし、私のうれしさは並大抵ではなかった。ひよっとしたら大倉先生は私にひいきをしたのであるまいかとさえ疑った。通信簿を交換して見せ合おうという友

達もあつたが、私はそれを拒んで、急いで風呂敷にまるめて包み込んだ。親父に納屋の中へぶち込まれる心配も消えた。②二期期になつたら、もっと立派な成績をとろうと決心したことは無論である。

(木山捷平『尋三の春』より)

(注)

- 1 癒ゆ…治る。
- 2 土くじ…土のかまど。
- 3 羽釜…炊飯用の釜。
- 4 甲上…当時の成績評価の最高点(乙、丙の順で評価が低くなる)。
- 5 山本春美…村の医者の子息。大倉先生が来るまでは、金持ちの息子であることにより級長を命じられていて、いばりちらしていた。
- 6 羅紗…厚手の毛織物。
- 7 操作…日ごろの行い(当時は評価の対象であった)。

問一 波線部A「仰々しい」・B「折悪しく」・C「かいつまんで」の意味として適当なものをそれぞれ後のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- A 仰々しい
- ア 大げさな イ 痛々しい ウ 寒々しい
- エ みつともない オ 一時しのぎの
- B 折悪しく
- ア しばらくして イ 仕事につかれて ウ きげん悪く
- エ 貧しい身なりで オ 都合の悪いことに
- C かいつまんで
- ア 丁寧に イ 具体的に ウ なぞつて
- エ 要点だけを オ 急いで

問二 傍線部①「眉をひそめた」とあるが、これは「母親」のどういう気持ちを表しているか。二十五字以内で説明せよ。

問三 傍線部②「この二、三日、く離れないでいた」とあるが、このときの「私」の気持ちとして適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 不満 イ 心配 ウ 不快 エ いらだち

オ うらみ

問四 傍線部③「傷の線の上に蛭草の葉を描き添えた」とあるが、これは「私」のどのような気持ちからか。説明せよ。

問五 Iに入る言葉として適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 照れて イ 恥じて ウ あわてて
- エ びくついて オ おどろいて

問六 傍線部④「憤怒がむらむらと湧き上がった」とあるが、なぜか。左の説明文の(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)・(Ⅳ)・(Ⅴ)を適当な言葉で埋めて答えよ。

春美に(Ⅰ)を裂かれたことが、まるで(Ⅱ)かのよう

問七 傍線部⑤「もう一度後頭部のこぶを大げさにさすりながら」には、「春美」のどのような性格が表れているか。適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア こぶを作られたことをみんなに見せてまわって同情を買おうとするやさしい性格。
- イ 自分のやったことは棚に上げて、「私」に責任を感じさせようとするずるい性格。
- ウ 自分のこぶの痛みを大きく見せることで、自分を許してもらおうとする甘い性格。
- エ 自分のことは反省せず、わずかな痛みを深刻にとらえて「私」を恨む、曲がった性格。
- オ こぶができたことも「私」の責任にしようとする、何でも人のせいにするわがままな性格。

問八 傍線部⑥「二期期になったらく無論である」とあるが、「私」がこのように「決心した」のはなぜか。「大倉先生」が「私」にとってどのような先生であるかをふまえ、自分の言葉で説明せよ。

*の欄には記入しないこと。

受験番号

一 解答は解答用紙(全2の1)に書け。

問一	①	□
問二	番号	□
問三	②	□
問四	適切な形	□
問五	③	□
問六	番号	□
問七	④	□
問八	適切な形	□
問九	①	□
問一〇	②	□
問一一	③	□
問一二	④	□

問一	a	□
問二	b	□
問三	A	□
問四	B	□
問五	C	□
問六	c	□
問七	d	□

問一	自分	□
問二	問三	□
問三	A	□
問四	B	□
問五	C	□

問一	II	□
問二	I	□
問三	問七	□

問一	A	□
問二	B	□
問三	C	□

問一	X	□
問二	Y	□

問一	□	□
問二	□	□
問三	□	□
問四	□	□
問五	□	□
問六	□	□
問七	□	□
問八	□	□
問九	□	□

問一	□	□
問二	□	□
問三	□	□
問四	□	□
問五	□	□
問六	□	□
問七	□	□
問八	□	□
問九	□	□

問一	□	□
問二	□	□
問三	□	□
問四	□	□
問五	□	□
問六	□	□
問七	□	□
問八	□	□
問九	□	□

問一	□	□
問二	□	□
問三	□	□
問四	□	□
問五	□	□
問六	□	□
問七	□	□
問八	□	□
問九	□	□

問一	□	□
問二	□	□
問三	□	□
問四	□	□
問五	□	□
問六	□	□
問七	□	□
問八	□	□
問九	□	□

問一	□	□
問二	□	□
問三	□	□
問四	□	□
問五	□	□
問六	□	□
問七	□	□
問八	□	□
問九	□	□

から。

*

気持ち。

気持ち。

*

*

*

□

*